厚生連医誌　第4巻　1号　87～93　1987

看　護

紙芝居による喘息教室の試み

菅沢久子[1)]　菅原千鶴子[1)]　伴田直美[1)]

〈はじめに〉

小児の気管支喘息は、発作性の呼吸困難をくり返す病気であり、多様な誘因によるアレギー反応が主役をなす。したがってその治療は、発作時の対症療法のみでなく、誘因の除去、既ち、非発作時の環境調整、日常生活の指導、心身の鍛練療法が発作を予防する上で重要となる。そこで私達は、昭和60年夏休みに第1回喘息教室を開催し、スライド使用による講義、喘息体操、腹式呼吸の指導を行いました。その後、アンケートにより喘息に対する母親の意識調査を行った結果、「スライドを使ったからわかりやすかった。」という事がわかり、視覚に訴える効果は大きいと考え、第2回目は小児にも興味をもって見られる紙芝居を作成し、発作の予防に重点をおいた指導を試みたので報告する。

〈対　象〉

当院小児科外来受診の喘息患児および家族。

〈方　法〉

- 55cm×40cmのボール紙に12枚の絵（挿絵1～12）
- ナレーション、医師、母親、太郎の声を4名で分担し、背景音楽を入れてあらかじめテープに録音しておいて紙芝居を行う。
- 夏休み2回に分けて開催(昭和61年8月8日、22日)

〈考察および結果〉

紙芝居を行っている時、4才以上のこどもは、1枚1枚絵が出るごとに興味を示し、じっと見ており、おもしろそうな顔をしたり、心配そうな表情をしたりする反応がみられた。そして「おもしろかったよ」「わかったよ」などの感想も聞かれ、そのこどもなりに少しでも理解できた様子がみられた。しかし、この年令は物事を長い間覚えていられない為、母親が内容を理解し、そのこどもに合せた話し方で紙芝居の内容を教える方が、よりこども自身が受けとめやすいと考えられる。そこで、母親に対しても紙芝居を使い、視覚に訴えて説明する事により、喘息発症のメカニズムや、発作予防の方法について理解を深める事ができ、母親の不安もやわらげる事ができると考えられる。「ただ聞くだけよりも絵があったからわかりやすかった」という感想も聞かれ、言葉で説明するより視覚に訴える方法がより効果が大きいと感じられた。

以上のことから、喘息教室を機会に作ったこの紙芝居を、入院中の喘息患児の指導にくり返し活用していけば、更に喘息に対する理解が深まると考えた。

〈おわりに〉

気管支喘息児にとって、発作時の対応のしかたはもとより鍛練療法や日常生活についての患児および家族に対する指導は、看護婦の大きな役割である。これからも、医師の治療方針と一体となった外来看護を行っていかなければならないと思う。最後に今回の喘息教室を開催するにあたり、御指導いただいた小児科医長渋谷先生に感謝致します。

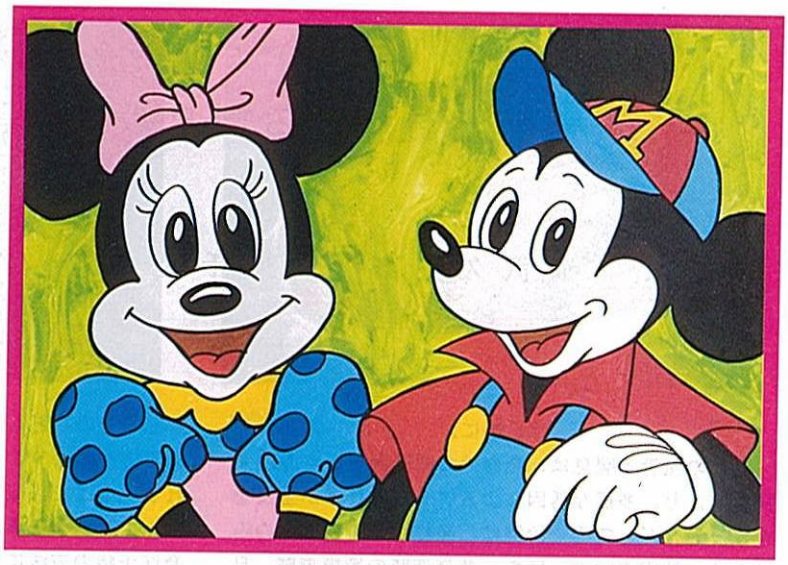
〈参考文献〉

1）飯島洋治也：小児の気管支喘息，285、1977.
2）清水巍：みんなで治す喘息大学，250、1985.
3）嶋田美津江他：紙芝居による術前オリエンテーション、小児看護，8．1986.

1）村上病院　小児科

ミッキー「皆さん、こんにちは、ぼくミッキーマウス、今日は、村上病院の夏休み喘息教室に来てくれてありがとう。ミニーちゃん、今日はどんなお話があるの？」

ミニー「まずみんなで紙芝居を見るの。それから、スライドで渋谷先生が喘息のいろんなお話をしてくれるのよ。それが終ったら、みんなの質問に、先生や看護婦さんが答えてくれるのよ。では、はじまり。



1

ーナレーションー

みなさん、これから「喘息なんかとんでいけー」という紙芝居をはじめます。この話は、太郎君が、頑張って喘息をのりこえていくお話です。

2

ーナレーションー

今日は、9月9日です、もう夜中の2時頃です。突然太郎君は咳こんで目がさめました。息を吐く時にとても苦しくなりました。

太郎「ゼーゼーゼー、お母さん苦しいよー」太郎君は、隣の部屋で寝ているお母さんを、大きい声で呼びました。

母「太郎、どうしたのこんな夜中に」

突然、太郎君が苦しみだしたので、お母さんはオロオロするばかりです。そこで、すぐ病院に電話しました。病院に電話したら、すぐ来るように言われました。

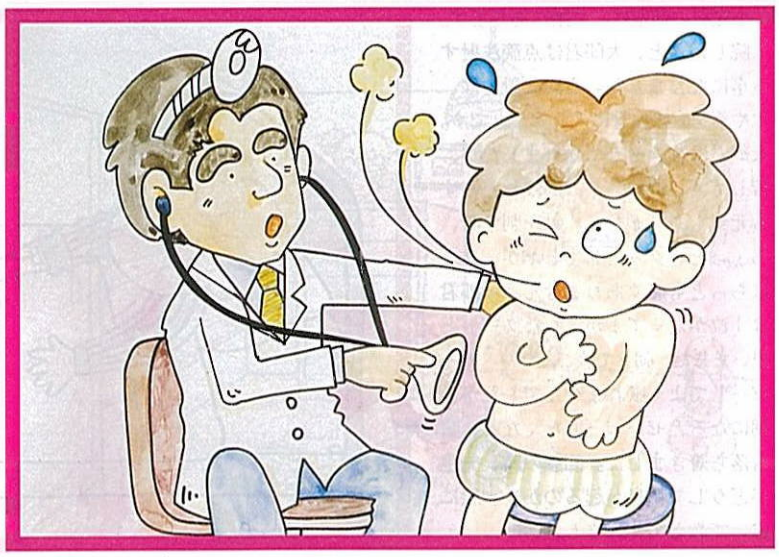
3

病院につくと、先生が待っていてくれました。先生も夜中に起こされて、とても眠そうです。

医師「いつから、このように、ゼーゼーするようになったのですか」

母「午前2時頃から急に息苦しくなったんです。先生、うちの子大丈夫でしょうか。このまま死んでしまうのではないでしょうか。いままでは、丈夫な子だったのに」先生は診察した後で、お母さんに話しました。

医師「太郎君は喘息という病気です。まず気管支を広げる薬を吸入することにしましょう。」



4

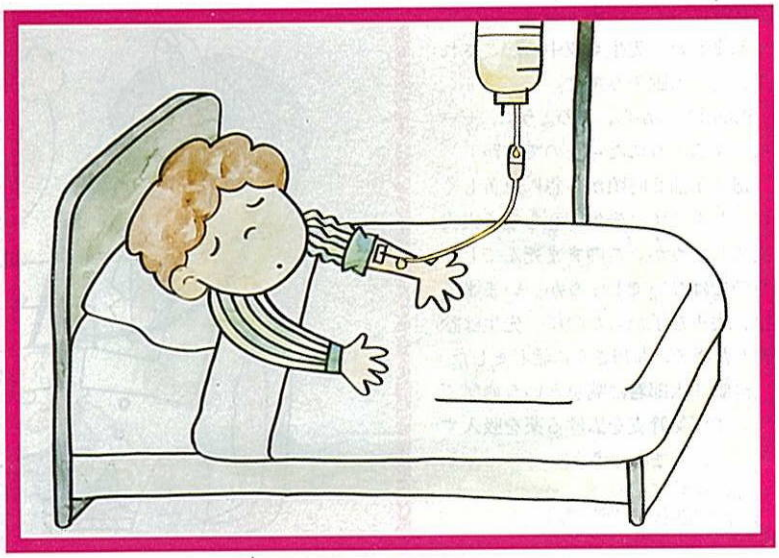
太郎君は薬を吸入しましたが、ゼーゼーはなかなかとれません。先生が言いました。

医師「夜間でもありますし、一日様子をみたいと思いますので入院して下さい。」

お母さんは、これから先喘息の発作がどうなっていくのか、とても心配だったので入院を承知しました。

5

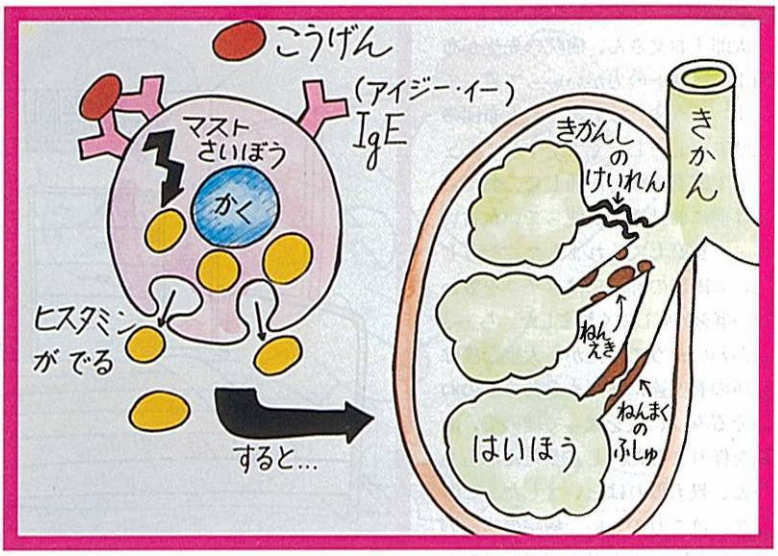
小児科の病室は、2階にあります。入院したあと、太郎君は点滴注射する事になりました。点滴注射とは、水や薬を直接血管に入れることです。太郎君は泣きそうになりましたが、苦しくて、泣いたり、あばれたりする元気もありません。針を刺す時、ちょっとチクッとしましたが、あとはちっとも痛くありません。太郎君は「泣かなくてよかったなあー」と思いました。朝まで咳こんだり、ゼーゼーしてよく眠れませんでしたが、朝になるとゼーゼーしなくなり、咳も落ち着きました。回診の時、先生がどうして喘息が起るのかを、絵に書いて教えてくれました。



6

「アレルギー体質をもった人に、抗原つまり、家の中のほこりや、花粉、カビなどが気管支にはいると、IgEという抗体ができるんだ。このIgEは、気管支の粘膜にあるマスト細胞という細胞の表面にくっつくのさ。ピンク色のがそうだよ。このマスト細胞の中には黄色くぬってあるけど、ヒスタミンというものをふくんだ顆粒がいっぱい入っているんだ。気管支に図の赤い丸の抗原が再び入ると、マスト細胞の表面で抗原と抗体がくっつく。これが刺激となって、マスト細胞の中のヒスタミンが、細胞の外に出て気管支をけいれんさせたり、痰を多く出させたり、気管支の粘膜をはれぼったい状態にしたりして悪さをするわけだ。こうして突然喘息発作が起って苦しくなるんだよ。」

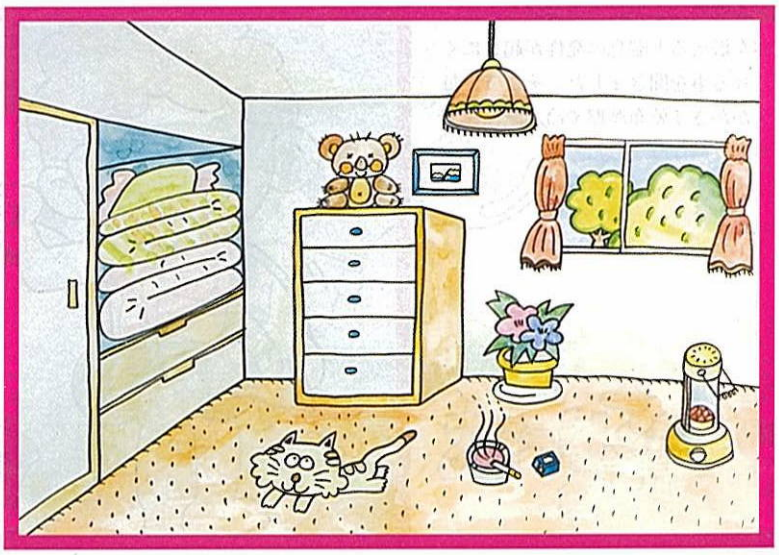
その日の午後退院する事ができました。



7

太郎君は、先生の話はむずかしくてよくわかりませんでしたが、太郎君なりに考えました。「そうか、ほこりがいっぱいあるから、喘息が起こるのか。」そうして、自分の部屋の事を思い出しました。

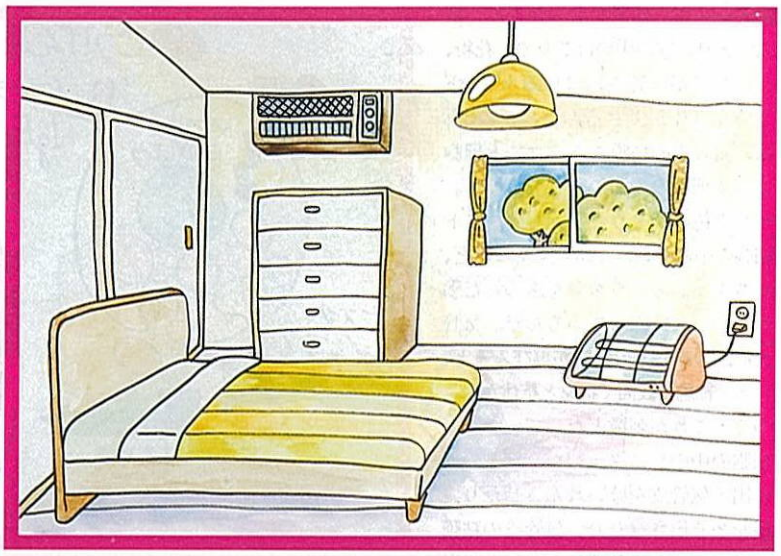
太郎君の部屋は6畳のタタミの部屋です。タタミの上に、じゅうたんが敷いてあります。太郎君は、猫が大好きで毎日一諸に遊んでいます。時々、お父さんが部屋に来てタバコを吸うため灰皿があります。お祭りで買ったお花の鉢植えもあります。夜になると、太郎君は、お母さんの敷いてくれた布団の上で猫と遊びます。太郎君は熊のぬいぐるみも大好きで、寝る時もいつも一諸です。でも、ところどころが破れ、中から粉の様なものがでてきます。こうして考えてみると、自分の部屋には、喘息の原因となりそうなものが、たくさんあるので、太郎君は、びっくりしました。



8

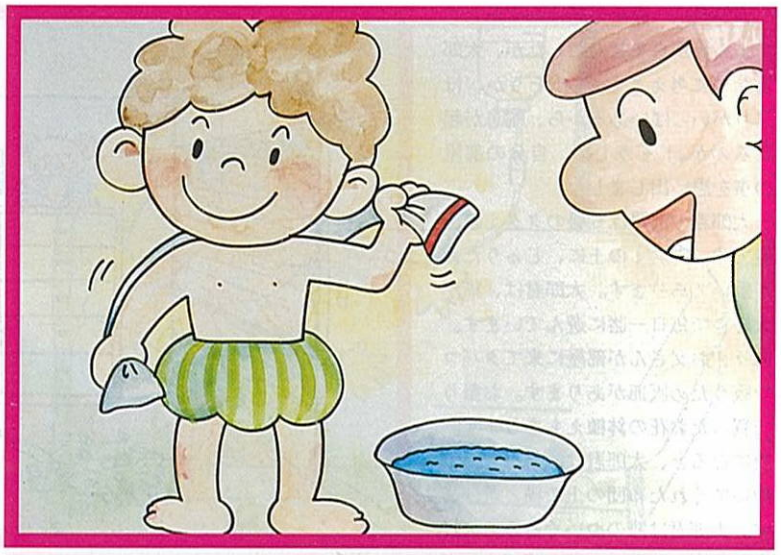
太郎君は、お父さんに頼みました。

太郎「お父さん、病院の先生が布団よりベットの方がいいって言ってたよ。そうすればお母さんも布団の上げおろしをしなくてもすむでしょう」太郎君の願いが通じて、お父さんは前にお姉さんが使っていた古いベットを直してくれました。そうして、太郎君の部屋ではタバコを吸わない事を約束してくれました。ちょっとかわいそうでしたが、大事な猫は近所のお友達にあげました。熊のぬいぐるみは、穴を掘って埋めて、お墓を作りました。じゅうたんはもちろん、畳も取りはらいました。こうして、ほこりのない、病院の病室の様な新しい、太郎君の部屋が誕生しました。



9

太郎君は小児科の看護婦さんに、体を鍛えると喘息の発作が起きにくくなる事を聞きました。そこで、毎日かかさず乾布摩擦や冷水摩擦をするようになりました。



10

それから冷水浴もしました。風呂に入った後、心臓に遠いところから、冷たい水を体にかけるのです。かけた瞬間ちょっとひゃっとしますが、その後はなんだか体がポカポカします。

11

こうして、太郎君はそれからめったに喘息発作を起さないようになり、また発作が起きても軽い発作ですむようになりました。

12